

城北中学校で5年以上取り組んでいる『学び合い』とは、どんな授業なのか？

1 『学び合い』はこんな授業

『学び合い』は、子どもたち同士で教え合い、学び合い、自発的に学習していく授業です。『学び合い』では、まず、先生が子どもたちに、その時間内で達成すべき課題を与えます。また、その課題を「一人も見捨てず」「クラス全員」が達成することを求めます。そして、子どもたちは課題達成のために、立ち歩いて他の子どもたちにわからないところを聞いたり、また、わからない子に教えたりするため授業中に動き回ります。『学び合い』は教師が何もしないという誤った伝わり方があります。しかし、それは違います。教師は1時間の授業で子どもが何をわからなければならないか、何をできるようにならないか、何をできるようにならないかを考え、授業の課題（目当て）として提示します。また、生徒がどこまで達成できたらいいかという評価規準を子どもたちに示して、授業後に評価を実施します。そして何よりも、全員が目当てを達成するために、子どもたちの関わりのようすをじっくり観察し、動きが悪ければ、誰がどのように動くべきかを指示します。現在の日本の教育の基本的な目標は、「子どもたち自らが自分の生活や社会とのつながりを意識して、学習に課題意識を持って取り組む。」「自分の考えを他者と交流して、しっかりとした知識や考え方を身につける。」「教科の学ぶ意義に楽しみを見いだしたり、社会が抱える課題にどうやって取り組むかを考えて実践に移す。」というものです。短い言葉で言うと「主体的で対話的な深い学び」という表現がなされます。『学び合い』は、その要素のすべてを含んだものです。



2 一人も見捨てない授業とは

「一人も見捨てない」という考え方は、部活動指導に似ています。多くの学校の部活動の場合、部員一人一人を大切にし、チーム一丸を求めます。全員野球、全員サッカー、全員吹奏楽、全員・・・だと思えます。様々な学年、クラスの子どもを、全員の軸で動かす時、必然的に『学び合い』になります。それは教科の学習の時にも当然、有効です。一日の活動時間からいけば、部活動より授業の方がはるかに長い時間をかけるのですから、授業の場でこそ人間関係作りを学ぶ場にすべきだと考えています。

3 「一人も見捨てない」を徹底することの意味

今までの授業では、子ども同士が関わり合うことを求める場合には、授業中に何人かの人に教えたり、聞いたりしたら、それでOKです。そして結果として課題を達成できない子がいても、その子に勉強する気がなく、他の人にも聞きに行



かなかったからとされます。しかし、『学び合い』での課題は、与えられた課題を全員が達成することです。全員が達成するまで、全員が課題を達成していません。課題ができなかった子どもばかりでなく、それ以上に自分ができたのにそのことを伝えなかった子どもにも責任があると、教師は子どもに語り続けます。この「一人も見捨てない」というこだわりこそが、『学び合い』の驚異的な成果の源泉です。これにこだわらなければ、クラスをリードする子どもは、ちょっとだけ教えたら「わかった、ありがとう」と言ってくれそ

うな子どもを教えて、終わりです。しかし、「一人も見捨てない」ということを求めることによって、なかなか関わってくれない、付き合うのに気を遣う相手に教え始めます。それは難儀です。しかし、結果として、教える側の子どももまったく違った視点で学習することがきます。相手が分かるように教えることができるということが、本当にわかっている証です。それと同時に対人関係のスキルも学ぶのです。一方でいままで見捨てられていた子どもが、学力でも人間関係でも見捨てられなくなります。

これから50年以上生きていく子どもたち、行く先には多くの困難があります。一人では解決できないことが必ずあります。そんなときに、助けて！教えてと人とのつながりを求める力を身につけてほしいです。また、困っている人に手をさしのべられる人格を身につけてほしいです。そういう意味も含んだ「一人も見捨てない」です。

『学び合い』に取り組んで、子どもたちが成長した姿

- 生徒が学びを楽しむようになった。
- 課題を終えても「分かったつもり」のままにせず、納得するまで求め続けるようになった。
- 仲良しグループを超えて、課題解決のために動き回り、新たな人間関係を作れるようになった。
- ノートすらとらなかつた生徒が途中まで解答を考え、どこまでがわかり、どこが分からないかを友だちに説明できるようになった。
- あの級友のおかげで勉強が分かるようになったと、人と学ぶ楽しみを語るようになった。